

水稻育苗箱施用殺虫剤の処理時期とイネ体内における推移

クロチアニジン又はフィプロニルを含む箱施用殺虫剤について、播種時処理と移植時処理のイネ体内濃度を比較した。播種時処理では移植当日の濃度が高いが、移植28日後以降の濃度は両処理間の差は小さく、処理時期による残効の違いは小さいと考えられる。

内 容

水稻殺虫剤の育苗箱移植時処理は広く普及しているが、移植時より前の育苗期の処理の登録も近年増加しており、移植時の作業分散や育苗期間の病虫害防除の面から注目されている。しかし、移植時処理より3週間以上前に処理を行う播種時処理では移植後の効果の持続性が懸念される。そこで性質の異なる農薬成分の移植後イネ体内濃度を調べた。

2014年、2015年及び2017年に、水に溶けやすいクロチアニジン（商品名「ダントツ」）と溶けにくいフィプロニル（商品名「プリンス」）について、播種時及び移植時の育苗箱処理に登録のある製剤を、各時期に処理した。そして移植後のイネ体内の農薬成分濃度の3年間の平均を求めた(図)。

クロチアニジンの播種時処理では移植時にはすでに高濃度となり、移植時処理の最高濃度となる

移植1日後の10倍以上となった。その後、播種時処理の濃度が高い傾向があるが移植28日後以降は両処理の差は小さかった。一方、フィプロニルは、移植当日は播種時処理と移植時処理とに差があるが、その後は両処理区とも同様な推移を示した。2成分とも、両処理間で初期濃度に差はあるが、移植28日後には濃度差が小さく、残効の違いはみられないと考えられた。実際に、ヒメトビウンカが媒介する縞葉枯病について、クロチアニジンの播種時処理は移植時処理より初発が遅く、後の発生は同等であることが確認されている。

普及上の注意事項

水溶性農薬の移植時処理で、移植後水田を止水すると、成分が溶出した田面水の流出が減り、防除効果向上と環境負荷軽減が図れる。

望月 証（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2420）

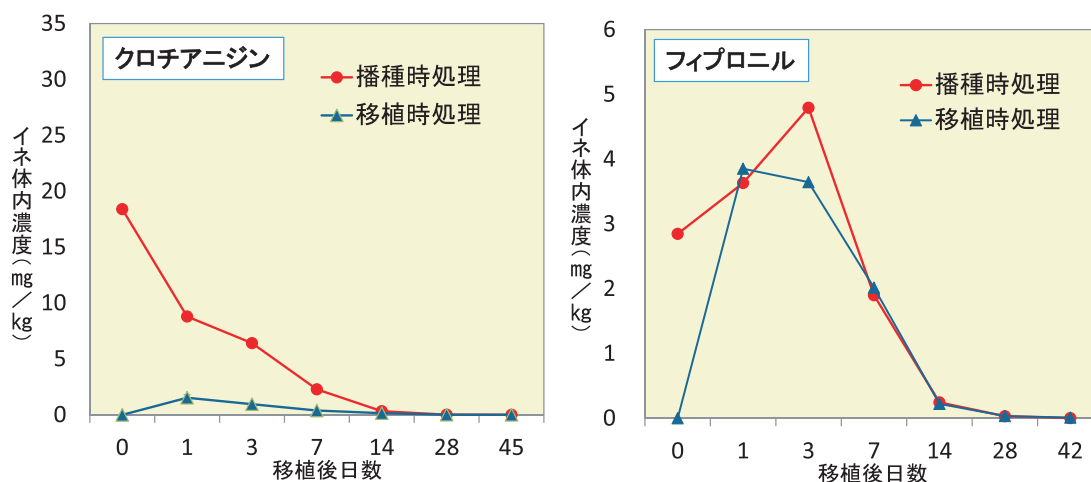


図 処理時期が異なる移植後水稻体内の農薬成分の推移